

梅崖芳話

全

特41

240

館籍書會育教本日大			
百 一 架 號	一	二	三
	一册	六號	四架
			七函

東
丁

019585-000-3

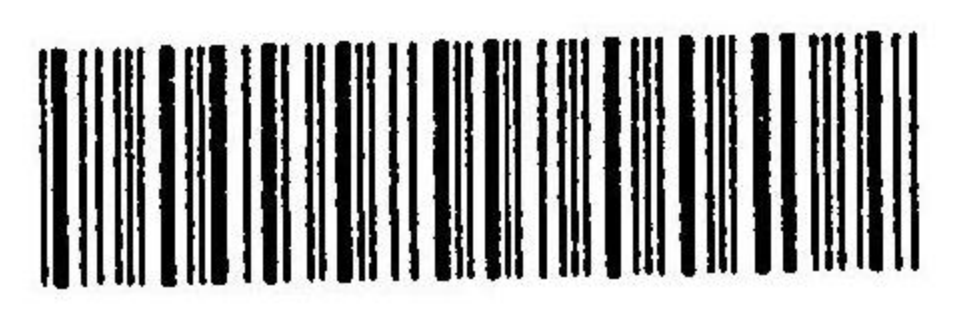
特41-240

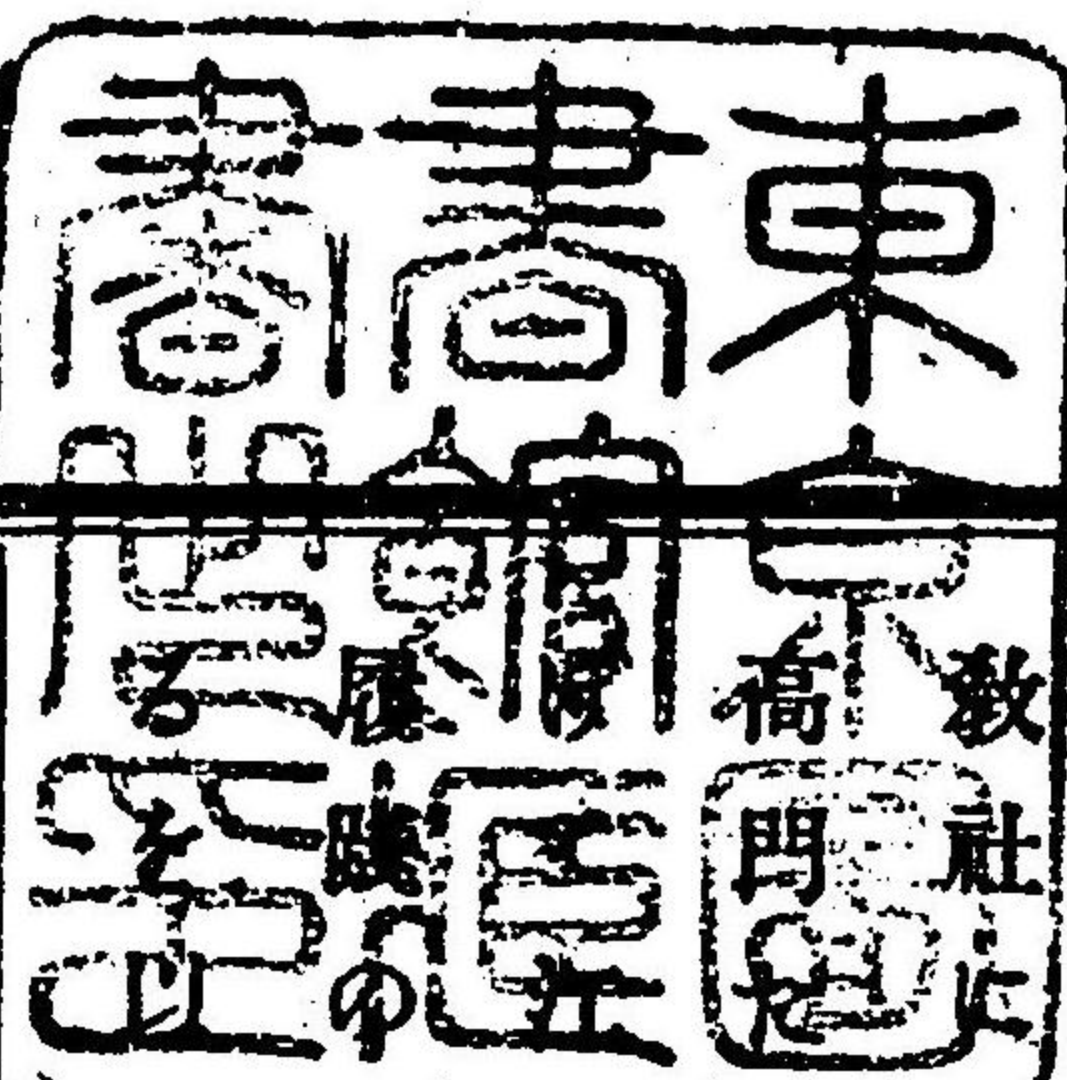
梅崖芳話

村上 泰音 / 述

M15. 6

ABG-0359





梅屋芳話緒言

我が故の三松關主禪師は實に今世稀有の高徳にして同宗
 緇素の鑽仰の更にも云はず他門は道俗もまた稱歎する所
 なりき況して其薫陶を蒙りしもれば雖か欣慕せざらんや小
 師もまた何の宿因ありてか曾て隨徒の末列を汚し殊に親
 しく巾瓶に侍して無窮の恩頼に澤ふの膝縁を感じたるを
 以て曩に一周の忌辰に丁り卒に行實一篇を草して之を明
 寄せし母社長居士親しく之を刪補して更に禪師の
 瀧谷教正に謀りて之が決を采り遂ひに新誌に掲
 湖の讀者に呈せられたり然る母彼の行實たる從來
 一斑を誌せしものなれば未だ全豹を窺ふに足らざ
 て小師竊かに之を遺憾となしたりし然るに日者二

三の客あり來りて禪師の行實を談せんことと請ふ依て小師が會て親しく拜聽せし所と自ら他に需めて見聞せし所とを併せ談るに客大ひに喜ひ遂ひに其話頭を誌して博く同胞に似さんことを再請を小師已むを得ざるに迫り漫に秃筆を呵して所談の樞要れみを摘撮し之に目けて梅屋芳話となせゆめは只同胞諸師と俱に梅樹懸崖の芳叢を追尋して高く勝躅に攀躋し以て萬劫の賜に酬ゆる資糧の一粒となその微志なるのみ取て諱を侵その意にはあらざるなり然り而して此篇は從來一夕對客の演述に過ぎざれば語句の拙劣事實の不完は自ら論ずるまでもなく或は烏焉馬の誤りなきを證しがたし諸師幸に之を諒恕したまはんことを明治十五年五月演者謹んで誌す

梅屋芳話

隨侍小師 村上泰音演述

伏して惟んみるに我が曹洞宗大本山石川縣能登國鳳至郡門前村諸嶽山總持寺獨住第一世勅賜弘濟慈德禪師大教正諸嶽奕堂大和尚は諱を梅屋と稱そ實に愛知縣士族平野甚右衛門の第三子なり

接するに平野甚右衛門は中古織田信長の家臣なりし別喜右近の女某の夫にして平野金左衛門と云へる士の遺族よて現に尾張の名古屋白壁町にその住所ありと云ふ然れば其祖先なる金左衛門は當時右近と俱に信長に仕へてありし頃同州の沓掛に若干の領地と得て居住せしもの、よしにて今同地に平野邸と云ひ傳ふる舊趾あり

文化二年乙丑の正月元日を以て尾州名古屋に降誕したま
ふ此辰母子ともに一點れ苦惱なく誠に爽快なる情態なり
しと云ふ

幼稚の頃は氣稟實に魯鈍にして骨格もまた随つて枯槁な
りき然りながら唯眼睛の爛燦として人を射る覺かに常流
の嬰孩に異りたまふ所あり父母尋常に之を奇しむ此兒は
定めて凡庸にあらざるべしと云ひて深く寵愛撫育を營く
し生長立身の期を候つこと頻りなりし

去るほどに文政七年庚午(禪師年六)の春の頃に至りて父は
病ひに罹りて臥せられしかば一家ひとしく看護の事に従
ひ名醫とさへ云へば遠くも之を迎へ良薬とさへ聞けば多
く之を購めてそゝむれども更に其効驗とてはあらざりし

斯くて翌年の秋に至りぬれば病ひ漸く劇しうして枕を歎
てがたければ親しく禪師を寢堂に招きて示さるゝには我
れ重症のために褥にあること尙しければ身支も梅のこと
くに瘦せ命根も絲のごとくに懸りて所詮快癒は覺束あけ
れば亡後には子ち必そ出家得度して我が冥福を營むべし
と云ひ終りて八月八日空く北邙一片の煙と消ぬられ乃ち
法名を天外普照居士と稱そ禪師痛く憂患したまひて追孝
修善の情も最と懇慇に表したまへり
これより後常に慈父の願命に遵がはんことを懸念したま
ひ願がて一周の諱辰も過ぎぬれば母に請ふて出家を聽る
されんことを求めたまふに母深く之を喜ひ遂ひに構へて
同州愛知郡沓掛村の聖應寺に詣で、曉林和尚に剃度を願

はれしるべ曉林和尚も大ひに之を嘉みして薙髮染衣を聽
るして大戒を授けらる實に文化九年壬申(禪師年八)の十一
月二十四日なりき

按ずるに聖應寺の本と久護山慶昌寺と云へる濟門の道
場なりしを昔時むかし正文祿の頃にやありけん前まへにいはゆ
る平野金左衛門その身別喜右近と俱に名古屋大光院の
護奕和尚に深く歸依して遂ひに久護山慶昌寺を改めて
平野山聖應寺と號し護奕和尚を開山に請して洞門の精
舎くわと名し自家の菩提所とせられしと予然されば禪師の同
寺に就きて落髮したまふ祖先開基の遠源を慕ひたま
ひしことなるべし

斯くて具戒の後親しく授業師曉林和尚の左右に奉侍し

て發心學道の初步を問ひまた法兄巍堂和尚に就きて朝課
暮誦の經典を習ひたまふこと數年なりき

曉林和尚平常の慈誨に曰く一日の事は早朝にあり一年の
事は元日にあり生涯の事は發心はつしんにあり一日誤りなからん
と欲せば早朝を正うし一年誤りなからんと欲せば元日を
正うし生涯誤りなからんと欲せば發心を正うすべし動靜
云爲すべて戲論に度らず行住坐臥悉く實地に動ひべし老
僧が履踐只是のごとしと以て日夜の垂誦とせらる禪師深
く之を服膺して措きたまふことなりしと予
また巍堂和尚は氣質實に下急にして緩泰を快よしとせら
れざるの風儀なればにや常に禪師を獎勵せらるゝに際し
て自ら苛酷に過る所ありしと云ふ

文政元年戊寅(禪師年十四)の春の頃母病ひの兆しありしが漸く重症となりて四月二十二日終ひに世に無き人の數に入られ乃ち法名を香譽智薫大姉と稱す禪師悲母に訃音を聞き直ちに走りて葬儀に従事したまひ熟く世相の夢幻泡影なるを觀じ身命の石火電光なるを曉りて精進を翹足に慣ひたまへり
既にして一周の忌景も過ぎぬれば禪師の肉兄某は悲母の報土を莊嚴せんためにとて曉林和尚に剃度を受け法號を亮機と稱して禪師の法弟となられしが當時もはや弱冠の晩年なりしとす
文政四年辛己(禪師年十七)の冬十二月十一日鐵堂和尚病ひのため圓寂せらる禪師の歎惜もまた深ありしよし

物換と星移るに隨つて魯鈍なる器宇も漸く卓犖穎敏に更り枯槁なる容貌も自ら端嚴方正と成りて翫かに撥草瞻風して禪家の堂奥を究めんと欲ふの志氣を決したまひ文政六年癸未(禪師年十九)の春に至りて曉林和尚の左右を辭し始めて負笈したまひしが同州山崎の黃龍寺道契和尚は行解兼ね備はれる宗師ありと聞き先づ往て參問したまふに道契和尚咄して曰く行脚の衲子は先づ豫じめ誓志を立て以て道に進むべしと禪師時に三誓を立てたまふ曰く
第一 生死の迅流を超斷せされば誓つて休せず
第二 二六時中佛祖不傳の行履にあらざれば誓つて蹊まず
第三 從劫至劫違情順境に於て誓つて第二念を生せず

時に道契和尚その法器なるを知りて掛錫を聽きるされし
バ禪師はこれより更に一層の精彩を着けて參禪問法須臾しゆん
も怠りたまふことあらずし

接するに道契和尚は嘗に禪定あるのみならず傍ら文才
にさへ達せられし尊宿なれば禪餘には雲兄水弟を鼓舞
して偈頌を醸し文字を學ぶことを勤められしと云ふ願ねが
ふに禪師の語句に巧妙にして且つ筆力の道勁あるはま
た聊か同師に依擬したまひし功勳いしゆんなるかも

斯くて禪師の識見漸く進みて遙かに衆表に踰ゆる所あれ
バ道契和尚その自ら接得せざるの任に堪へがたきを覺り指
して濃州關の龍泰寺來應和尚に見まへしめらる時に文政八
年乙酉(禪師年二十一)の春なりき

然れば來應和尚の化門最と盛んにして泰元、曹洲、翔道など
云へる勳舊も常に留錫せられければ是等の諸師と俱に同
敵和唱して宗乘の奧義を摸索し頗ぶる省悟したまひし所
ありしとす

金鳥飛ぶこと早く玉兎走ること速かおして既に六回むたひの星
霜を閱みせしに禪師未だ脇を席上に着けたまふことなく
自ら發憤激勵して法のために身命の存亡を顧みたまはざ
りしかば來應和尚も痛く之を賞せられ天保元年庚寅(禪師
年二十六)の冬遂ひに禪師を同寺常恒會の版首に任じて化
門を補弼せしめらる

斯くて翌年の春九旬圓成の後ハ直ち母本師曉林和尚を尾
州に省して入室嗣法したまふ實に承陽三十八世の法孫に

してその正脈の係る所ハ左のごとし

永平道元 孤雲懷奘 徹通義介 笠山紹瑾 峨山紹碩
 通幻寂靈 天鷹祖祐 天先祖命 直翁宗廉 魁叟永梅
 久翁英長 輝英慶葵 宜叟發周 超鷲祖宗 山就周泰
 久山賢悅 明叟周見 天澤義恩 確屋文春 日山樹林
 天山用益 佳雲恩陵 南陽嫩壽 天室嫩白 天江嫩良
 蘆洲英荻 乙先秀存 久巖傳昌 周巖全鼎 逸山博秀
 北川祖關 聞桂無隱 一明祥麟 月耕灌田 粟山祖龍
 牧菴山童 雪堂曉林 梅屋奕堂

既にして面授面稟の後は再び法幢師來應和尚に依棲したまひしが翌年曉林和尚は再會の結制を修して來應和尚を西堂に請せられしかば禪師も之に随つて歸寺し高く雪峯

飯頭の勝躑に攀じて滿堂の僧衆を供養たまへり
 頓がて解制自恣の長に至りぬればこゝに且らく來應和尚の座側を辭し更に曉林和尚の膝下を離れてこれより後數年の間は竹杖茅鞋あまねく知識の關鎖を敲きて足跡天下に遍ねらし到る處貴重せられて大ひに英名を幾林に馳せたまへども未だ是等の地步に止まりたまふことなかりし然ればその頃の事にやありけん春秋の解間には煙蓑雨笠親しく曉林和尚を省して運水搬柴の勞は更にも云はず耕雲種月にまで苦役したまひ一は水木を汚その料を償ひ一ハ本師の厚恩に酬ふるの微資となまとのたまひしとすまた暫くも駒隙あれば自ら古鏡照心のためにとて永祖の正法眼藏を繕閱し笠祖の傳光錄を謄寫したまひしよし

按ずるに傳光錄手澤三卷は現に聖應寺に秘藏せり
 斯くて禪師は竊かに惟たひたまふに天下箇々の長老頭腦相
 似て超出の者なし誰か我がために鑰匙子を乗る者あらま
 同しとて機ま々に苦慮したまひしほとに天保九年戊戌禪師
 年三十四の春に至りて三州足助の香積寺風外和尚より胸
 宇灑洒にして明々に學道の正邪を辨じ接化に切實なるこ
 と眞に齊肩の人少れなるべしと云ふを聞き深く之を悦び
 たまひて遂まひに參見を志したまへり
 然るに風外和尚は實に孤危險峻にして葉縣爲人の手段に
 讓ることなきの家風なりしるべ人の能く其門に到ること
 稀れなるに禪師は直ちに進みて留錫したまひ親しく巾瓶
 に奉侍して苦修練行抄ま時まも怠りたまふことなかりし

これより後風外和尚の出雲の國において所々に助化の請
 ありしるべ禪師および無關和尚などを率ひて彼處かこに赴き
 西堂の職を務められしに禪師の侍者の任を帯びて百事を
 統轄し首尾一點の缺漏あらしめたまひまた解間の頃ハ
 同州平田の骨堂と云へるに容膝の地を卜めて葺ハ荒村に
 食を乞ひ夜の歸りて安禪したまひ眞に脱白の景况あきにて在
 ませしと云ふ

こゝに天保十二年辛丑禪師年三十七の春風外和尚ハ香積
 寺を俊龍和尚に繼がしめて浪花の烏鵲樓に閑棲せられし
 ろハ禪師も之に隨行したまふ
 一日風外和尚楞嚴經無着心宗の語を擧示せらるゝを聽き
 て言下に從來の窠舊を脱し覺へず手を拍せること一拍は

じめて風外和尚の印可を受け自ら灑々落々たることを得
たまへりとか

同く三月二十三日來應和尚は三州八幡の最明寺に於て遷
化せらるゆゑに此秋七月禪師は遠く濃州に往て同師の塔
を掃はんと欲して別を風外和尚に告げたまひしうば風外
和尚偈を賦すること二首して之に送らる曰く

荷法誠心不等閑。三年扶我至機關。葦林衰廢思君興。臨別爲
歌行路難

林下今無獅子遊。野干只見聚同流。老禪賴有抱慊慨。莫混邪
媚諂佞儔

禪師遂ひに行き尋いて曉林和尚を尾州に省したまふ
翌年の夏風外和尚は默旨尼等の懇請に依り京師に出で、

碧巖集を提唱せらる禪師之を聞きて直ちに講席に侍した
まひまた東山真如堂の塔中に蝸居して京坂の間に逍遙し
再たひ風外和尚に参じたまへり

天保十四年癸卯(禪師年三十九)の春曉林和尚は老病の兆し
ありて住務の責に堪へがたければ禪師を招きて後席を譲
り退いて餘生を養はんとせられしに未だ學道の熟せざる
を唱して遂ひに命に遵がひたまはざりしかと本師の苦惱
も推量られて最と心もとなければ暫らく曉林和尚の法弟
なる契禪和尚と云へるを擧げて師席を繼がしめたまひて
再ひ京師に歸りたまへり

此年五月二十三日曉林和尚示寂せらる時に遺偈あり曰く
夢中說夢。六十九年。末後行脚。倒翻鐵船。喚閻王來也。三十棒

訃音至るに及んで禪師親しく茶毘の禮を修したまひ因みに一圓相を畫して本師の眞に擬らへ之に題贊したまふ曰く

月落鏡破。影像難親。混沌全體。誰敢安眉。夢中說夢。呵素瞞緇。放出畫餅。治幾人飢。個沒巴鼻。超龍樹規。六十九歲。聖應無私。彈。一輪空沈。霜林曉。不覺令吾粟滿肌。

既にして翌年の秋に至りぬれば禪師病かに思ひたまふに紫陌紅塵の中に出沒して世の喜怒哀樂を耳目に觸るゝは從來我が本懐ならねば今より後古人の芳躅に攀躋して深山幽谷に入るべし何の處にか好地はなきやと其舊識なる俊靈和尚に尋ねたまふに同師は云へるには然れば洛陽の北八九里を過ぎて大悲山と云へるありこゝ予師の聖胎を

長養せらるゝに極めて好き所ならめと禪師深く嘉みして遂ひに之を風外和尚に告げたまふ風外和尚また偈を賦して送らる曰く

大悲山裡路。超嶺又超峯。何日尋芳躅。雲間得再逢。禪師之を和して酬ひたまふ曰く

鳥道伴游龍。穿雲入萬峯。善財非種草。何用更相逢。

禪師遂ひに入山したまひて遠く大梅の舊家風を慕ひ常に園寂枯淡の安居を楽しみたまへり

按ずるに大悲山の山城、丹波、若狹の國境に位るを乃ち京師より入るときは洛北の鞍馬山を超へて別所、大布施、八升原など云へる村落を過ぎ頓がて寺谷と云へるに到ればこゝ大悲山の麓にて嶺に登れば施無畏者を安置せ

る堂宇ありて法乘寺と號を聞く所によれば昔時平清盛の草創する所に係ると云ふ即ち禪師の棲遲したまひし靈地あり實に巉巖怪石高く聳へて雲霧の表に超へ窮谷幽澗深く澄みて流水の底を顯はしその中間は蒼樹陰森として遙に天日を隔離されば晝も尙ほ暗く僅かに鹿徑を通ずるあるも踵を變べがたきばかりの險所さへ過ぎて漸やくこゝに達るの佳境なれば禪師も痛く歡びたまひしとす

斯くて禪師は此山に在ませども風外和尚の安否もまた懸念したまひて幾回となく浪花に出で、同師の寒温を訪ひ傍ら禪談を請益して没量の宗を參敲し自ら悟後の大用證上の修行を勵みたまへりと云ふ

接するにその頃の事にやありけん禪師三更を侵して出山したまひ林間に漏るゝ月の光影をたよりとして漸やく鞍馬の嶺に躋りたまひし頃は最早や拂曉の天なれども從來叢樹の鬱茂せる山なれば實に四顧曠昧の辰なるに悄然として寒毛卓豎をと思ひて遙かに彼方を見たまふに燦爛たる二粒の異光を放てる怪しきものゝありしかば覺へず大息一呼して須臾は脚蹠したまひしが異光漸やく近づくに丁りて密かに之を覬覦したまひしに圖らざりき一頭の狼子なりしかば禪師は深く慈愍の念に翻へりこの真皮袋を彼れに施與して飽滿するに任せんと既に心を決したまひ徐ろに路傍の石上に坐して三歸戒を默授したまふに奇しむべし狼子は禪師の容貌を仰

き見つゝ尾巴を垂れて過ぎければ禪師は些かの危難もなく頼がて浪花に出でたまへり(この一則の因縁の小師が曾て禪師に依棲の時親しく拜聴せる所に係りしが遣回芳躅を演ぶるに際し高祖禪虎の舊奇縁などもまた思ひ合あされて最いと有難さに語の繁冗をも顧りみずこゝに挿みて芳話の莊嚴といなしぬ)

既にして弘化四年丁未(禪師年四十三)の春に至りぬればその舊識なる城州山科の大宅寺藏雲和尚の禪師の久しく頼光昧跡したまふを欣慕し今より後ハ世間に出で、接衆待實したまへんことを願ひために自ら退住して禪師を同寺に請せられしに禪師の誠意の棄てがたきに迫り遂ひに大悲山を出で、同寺に初住したまひしかば藏雲和尚の舞

躍實に云ふいなりなく自ら挂搭状を認めて隨侍の身となられしが之を禪師の圓覺海に入られし人の權輿はじりとなすと云ふ

按ずるに大宅寺ハ山を靈隱と號を禪師ハその十八世なり然るに維新の後如何なる故にや廢寺となれり惜むべきの至りにこそ

同く二月遠く能山に登りたまひて宗規のごとく轉衣の式を整のひ尋いて京師に出で、繪旨を拜戴したまひ歸山の後はこゝに始めて化門を開きたまひしが常住最いとも淡泊にして境内悉とく荒蕪の地なれば親から鍛鋤を提げて耕耘を事としました掃箒を拈じて塵埃を淨めたまひ苦辛を俱にして常に七箇の衆を接したまふその住處を問へば陽岐

の屋壁も甍ならず二時の食糧は遙かに芙蓉の米湯を慕ひ
たまへりと云ふ

當時雲州坂田の徳林寺檀徒なる勝部某と云へる者禪師の
徳風を遠望して懇懇に同寺に移住したまはんことを願へ
とも禪師は大宅乍住の際なればとて遂ひに赴化を辭した
まひ更に風外和尚の法嗣ある覺印和尚に託してこの應請
に代らしめたまへり

同く六月二十二日風外和尚老病によりて滅度せらる禪師
直ちに走りて津送に従事したまひ因みに追悼の偈と賦し
たまふ曰く

鳥鵲高飛不復還。清風空拂月明邊。唯餘蜀魂歸聲切。徹夜令
吾仰碧天。

また同く七月十四日聖應寺契禪和尚遷化せられ禪師その
後席に當りたまひ翌年の夏五月大宅寺の住務を道耕和尚
と云へるに譲りて遂ひに聖應寺に移轉したまひしかばこ
ゝに名聲高く揚りて隨徒五十餘員に及べりと云ふ

接するに禪師は同寺の十五世なり

この冬武州末野の少林寺大運和尚と云へるが結制を興行
して禪師を西堂に請せられしに禪師之に應じて彼所に赴
き親しく雲兄水弟を銘治し苦ろに信男善女を誘掖したま
ふこれぞ禪師の助化したまひし遷鶴と云ふべし

嘉永二年己酉(禪師年四十五)の春三月上州前橋の藩主酒井
侯の歸依および同地の龍海院元牛和尚の懇請によりて同
院に轉住したまひ乃ち聖應寺の後席は亮機和尚に繼がし

めたまへり

接するに龍海院は酒井侯の菩提所にして山を大珠と號
そ禪師はその二十八世なり

これより後更に風外和尚の家風を一摸に服出し常に懸崖
一撒の手段を須ひて普ねく來賓を接得しまた博く諸方助
化の請に應じたまふこゝに於て江湖の學者輻湊すること
市のごとく當時一宗の龍門と号すなりしたりき然れば同院
住中の隨徒は既に三百數十員に及べりと云ふ

既にして安政四年丁巳(禪師年五十三)の冬十月能山の特撰
および加州金澤の藩主前田侯の歸依によりて同地の天徳
院洞門和尚の後席を繼ぎたまひ乃ち龍海院を藏雲和尚に
譲りたまふ

接するに天徳院は前田侯菩提所の隨一にして山を金龍
と號そ禪師はその二十三世なり

斯くて禪師の家令は愈々嚴密にして規矩準繩をこしも
緩弛をることなかりしを龍象は躡もまた随つて無邊
にして普ねく甘露の法雨を澍ぎたまへり

安政六年己未(禪師年五十五)の春三月亮機和尚遷化せらる
訃音至るに及んで禪師親から尾州に往きて百事を點檢し
併せて先師曉林和尚の十七回忌法會を修營したまひ因み
に掃塔の偈を賦したまふ曰く

打胸會自哭蒼天。胡蝶夢回十七年。三喚託風松駭耳。片心感
雨。葺伸拳。黃金骨節山花覆。生鐵眼睛霜月鮮。誰識先師無
相。半思半恨一爐烟

然るほどに明治初年に至り越能兩山の間に於て積年密
りに萌生せし葛藤を紛擾して彼此軋轢底止せることなく
恰も水火れ相容れざるがとき形勢なりしかば禪師は止
むを得ざるに迫り能山代理の任を帯びて東西二京の間に
馳せ越山と幾多の辨論討議を竭くし百折千磨法のため
に身命の存亡を顧りみたまはず白刃を蹈み累卵を擎ぐる
がごとき危難を経て漸やく代理の責任を全ふし遂ひに葛藤
を截斷したまひしと云ふ實に然るもありしにや
斯くて禪師の在山なき間とても天徳院の安居は勤奮諸師
の補翼によりて學道行法兩つながら最と精勵にせられし
かば鳳凰の來宿もまた極めて夥しく既に住中の挂搭は五
百數十員に及べりと云ふ

明治三年庚午(禪師年六十六)の秋七月二十五日 勅命に依
りて總持寺住持職の重任を拜したまひしかば天徳院の後
席をそれ道交ある活宗和尚に譲りたまふ
また同日 特旨を以て弘濟慈徳禪師の徽號を 賜ふ因み
に中御門大納言殿下副狀を贈りたまへりそれ文に曰く
諸嶽翠鎖遮斷佛魔之往還總持門開縱任龍象之蹙蹙時雖
屬滅劫法豈有古今奕堂和尚轉舊窠窟提新定機曾觸著來
應之鉗錘鈍鐵去鏽更投入風外之爐鑪眞金放光不憚千辛
屢掃蕩妖邪陰霾不消一涅自挽回法海狂瀾德光輝寰宇道
價馳丹墀仍特賜弘濟慈徳禪師號暨總持寺住持職 宣旨
誠是宗門盛榮彌抽懇念宜奉祈四海泰平玉體安全者也
明治三年七月二十九日 大納言(花押あり)

總持寺奕堂和尚禪室

同く二十九日御禮參内 天顏拜を得て同く九月能山に登り晋山ならびに祝國開堂の大禮を修したまひしに三樹松關の月の千秋諸嶽の靈光を發轉し九重楓陛の風は萬德總持の法義を開演さるとあるがごとく山笑ひ水歌ふて自ら祥瑞の相を旌はし群來の宗侶參集の信者經緯織るに似てさながら櫛比の名稱に背くことなく俱にく萬歲を祝えたりしが其節禪師の唱へたまひし法語等は左のごとし

三門に曰く

撥開向上關。掃蕩聖凡轍。萬古總持門。一朝新風月

佛殿に曰く

掩室於摩竭。因甚不藏全體。不違不隨。齊之以禮。

伽藍に曰く

正直無私。靈聰有主。呵護叢林。千古萬古

祖堂に曰く

語音雖別。鼻孔一般。聯芳續焰。指柏罵菴

兩尊を禮して曰く

父劫殺。子證之。冤讎相報。累及乎台

據室して曰く

這裏無傳受底法。唯是臨機打龍打虎。雖然與麼不喚。二作五。儻或躊躇。君向西秦。我之東魯。

視筭して曰く

總持無字印。印破盡乾坤。纒要觀文彩。鐵牛夜裏奔

拈衣して曰く

一肩鹿布。唯足藏。灑。纒論。授傳。金毛成狗。

勅責を戴して曰く

九重勅降。為祥。為瑞。四海八蠻。歸第一義。

山門疏を拈じて曰く

廓落總持門。不啻惹寸塵。論枓柄。長短分與家裏人。

道舊疏を拈じて曰く (この疏三本あり)

魚相忘於江湖。人相忘於道術。認得穿被底。舊上三人證。龜成鼈。

近門疏を拈じて曰く

一貶一褒。鼓琴打笳。空中。文彩。一任眼花。

法座に曰く

機不離位。已墮毒海。脚下雲生。是何所在。

拈香して曰く

這香盤。根。三界。覆。蔭。九。垓。隻手。拈起。燕。向。金。爐。端。為。奉。祝。延。

今上皇帝玉體康寧。聖壽萬歲。萬々。歲。陛下。欽。願。敬。算。踏。度。

却芥城之量。皇基齊。泰山。却石之安。

這香奉。為。三。州。大。藩。主。蒼。原。賢。侯。資。倍。祿。算。伏。願。長。承。桓。文。之。

功。翼。載。王室。親。應。佛。陀。之。囑。擁。護。法。門。

這香奉。為。當。山。開。祖。國。師。二。世。嶼。山。老。和。尙。上。翻。慈。恩。伏。惟。黑。

漆。崑。崙。夜。裏。奔。蛇。胎。石。變。化。鵬。鯤。從。來。六。耳。不。同。計。風。駭。睡。魂。

月破昏。

這香為。五。院。開。基。諸。大。和。尙。伏。惟。一。華。五。葉。流。芳。江。湖。信。手。拈。

出。薰。翻。一。爐。

這香為。本。願。檀。那。定。賢。律。師。以。酬。不。啻。往。昔。捨。短。隨。長。遜。讓。芳。

躡。永。却。看。護。之。願。力。

這香久拋在丘壑。贏得皮膚共脫落。眞實亦不存。今日不免拈。出人前。供養前。聖應雪堂老師。以酬冤讎。難忘。

索語に曰く

諸嶽秋深月。瞋虎眼。三松夜冷風。起龍吟。此中若有知音客。不墮五音六律。試請機前唱和來。(次に問答あり)

提綱に曰く

拈一機。則千機。萬機頓赴。如刻一人。糞作梅檀香。舉一句。則千句。萬句朝宗。似持蠶殼。量大海。水山僧行業。無取用。捨行藏等閑。隨緣水。無沈影。意身無移蹤。思雖然。與麼宿債未了。被業風吹轉。又向北溟。駕鐵船。奈何大法陵遲。時當象季。縱令用盡小神通。復唯土上加泥而已。敢請文殊普賢。爲新總持。打篙搖櫓。勢至觀音。張帆把舵。但能唱和同心。自然無不可。不滯彼此中。

統直教。盡十方。塵毛刹海。森羅萬象。任運流入。塵嬰若海。爲依爲拈。正當萬機。一箭聯芳。結果一句。作麼舉唱。卓拄杖。一下して曰く。天高群象正。海濶百川朝。(謝語零を) 記得投子。大同禪師。因僧問。和尚住此山。有何境界。師曰。了角。女子白頭。絲拈して曰く。投子老漢。雖烈焰堆中。飛雪片。爭奈此僧。被語路轉却。終起不得。若有人問。山僧和尙住此山。有何境界。和聲痛與一頓。何故如此。只要他直下自知。閑雲流水。不同歸。伏惟久立珍重。

當晚小參示衆に曰く

之乎者也。一千八百。展事投機。總是世諦流布。衲僧家。絲毫非所豫。若是本分行脚。高士直須懸崖撒手。自肩承當。絕後再蘇。來欺君不得。山門開闢。日五院。開基連署。結約輪次。推挽以轉。

大法輪、妙用軌外驚天動地。爾來輪董同途不同轍、一唱一酬、擒縱與奪、高弄宗乘、續其芳躅、追隨時運、變遷千斤、誓終不能、穿魯縞、自然成世諦、流布去尙時當、王政維新、特令隻手而推之、山僧斯日被天龍推轂、事不得已、枉作三松關中主、未布一陣、施一計、早已弓折箭盡、無路轉機、輪幾毛哭窮途、人天衆前、敗闕不少、且道是世諦流布底、是途中受用底、良久、曰、
 (若)是金毛獅子兒、三千里外見諸說、
 斯くてその法式最と殊勝にもまた盛榮にして恙がなく能
 山獨住第一世の鴻席に立ちたまへり
 接するに能山の數百年の間五院輪董れ地なれば定まれ
 る貫主としての無かりしが幸に 王政維新に際して
 て従前れ輪住を廢し更に禪師に 勅して獨住れ端を開

かじめたまひしこと、從來優渥なる 聖恩に出るもの
 なれともまた禪師道德の依つて感ずる所なるべし、最と
 有難き次第にこそ
 曩きに兩山の間に紛擾せる萬端を截斷して、稍一宗の平穩
 を得たりしかと未だ十成の公案とならざる處も多ければ
 にや禪師再たび東京に出で、越山と協議をなし互ひに親
 睦を旨とするの方策を立てたまひ、明治五年壬申(禪師年六
 十八)の春、遂ひに大藏卿閣下の懇切なる演達に依りて、斷然
 兩山の宿惡弊を一時に掃却して、昨日の水火の今日の水乳
 と成り、彼此相和して、兩祖の道風を悠久に播揚し、以て俱に
 末派を維持し、檀信を倡導したまふの宗制として、始めて定
 まりしと、予誠に同胞縑素の一大慶幸と云ふべし

按ずるにこの際に當り専ら禪師に左袒して護法扶宗に丹精を抽んでられし方々は乃ち今の信州靈松寺達淳、攝州大光寺彦龍、遠州可睡齋穆山、越後前慈光寺琢宗等の諸碩徳にて越山に於ても貫主殿下を始めたてまつり自餘の宗師家も大ひに該事に扼腕切齒せられしよ志に承りしが當時の實に排佛毀釋の論外に鳴りて魔強法弱の頃なれば内にこの弊害を矯めて和合無諍の功績を奏せらるゝの勞苦の實に粉骨碎身も曾ならざりし情景ならめまた感激の至りならずや

これ年政府教導職を置きたまへるに當りて禪師の四月二十八日新たに權少教正に補せられたまひ尋いで六月十三日大教正に轉昇したまへり

あるとき能山の監院竹堂和尚の禪師の肖像ならびに題讚を請ひたてまつられしに禪師親から眞像を描きたまひ之に自讚して與へたまふ曰く

三界無頼。窮也。要。脱。步。々。超。方。隨。緣。得。轉。撥。慈。眼。紛。暫。倚。靈。隱。修。廢。壘。荒。擊。空。聽。韻。御。平。野。風。吟。二。村。松。破。鞋。如。虎。瘦。筇。似。龍。利。水。乘。桴。親。弄。大。珠。一。跳。龍。海。鞭。千。里。駒。橫。行。邦。域。感。瑞。天。德。雪。頂。龐。眉。飽。契。慳。懃。兩。京。張。陣。幾。陷。白。刃。高。奏。凱。歌。再。全。蘭。蓮。嘆。月。朗。總。持。無。字。印。棲。寒。老。柳。殘。眠。驚。

按ずるにこれ一軸の竹堂和尚の納められし所となりて現に能山の寶庫に秘せ

明治十一年戊寅(禪師年七十四)の春二月能山に於て僧堂を開き廣く四來雲衲に挂錫を許容したまひ天徳院悟由和尚

を擧げて西堂に職に任じ提攜薰陶に助化をなさしめたまへり
また翌年春三月東京に在して越山貫主と胥議り兩山は混和親睦を更に一層鞏固ならまめ且つ永劫宗制一途に出で互ひに偏頗なきの確證となさべきため數箇條の盟約を結び兩山の執事および直末總代を徵して之に連署をなさめたまふ

按ずるに此際の盟約に參與して連署をなしたる方々は乃ち永平寺の執事には越前孝顯寺雪鴻、江州清涼寺良範、甲州大泉寺顯高、總持寺の執事には越後前慈光寺琢宗、攝州大廣寺彦龍、能州芳春院竹堂また永平寺直末總代に相州最乘寺椹仙の肥後大慈寺堅高、總持寺直末總代に相州最乘寺椹仙の

諸碩徳なりしよし

同く夏東北諸國の門末および信徒の懇請に應じて同地を巡教したまふ因みに一律あり曰く

浪跡東西七十秋。豈圖時變動。宗猷幾忘。驅命探龍。領獨立雄。基據虎頭。佛日轉輪。驅颯皇風。鼓鑄辨金。餘赤幡。今賴歸吾手。更欲游洲。慣趙州。

斯くて老苦をも厭ひたまはず炎暑を侵して所々を巡回したまふほどに定めて煩熱の障りにやありけん些か病腦を示したまふその頃また一絶を賦したまへり曰く

棲息不應過一枝。雲林隨處此生涯。昨非今是俱忘却。只聽松風十二時

按ずるにこの一軸は曾て禪師に結縁ありし尾州名古屋

此森本某へ遺贈として遣ひしたまひし所となりて現に同家に秘藏せり

病ひ漸やく重うして良醫奇薬も遂ひに功を奏せることなく明治十二年己卯(禪師年七十五)に秋八月二十四日午後六時羽前大山に善寶寺において化儀を戡め大涅槃に唱入たまふ時に法臘六十八歳なりき

然れば法侶随徒に悲慟哀哭檀信歸依の涕泣冥悶實に云ふばかりなかりしが先づ假りに茶毘して靈骨を遠く能山に衛送したてまつり同く十一月五日を以て越山貫主絶學天真禪師環溪大和尚を乗炬師に請して茶毘に本式を修せられしが幾千の僧侶數萬に信者が雲集水合して慰慟に葬儀を拜せし景况は殊に今更云ふまでもなく折節霖雨の車軸

を流そがよとき天なれば松關の凜風も自ら憂苦を訴ふるの聲を帯び楓陸の落葉もさながら悲涙を含むの色を呈しそ實に寂然たる情態なりしがこゝに越山貫主殿下の乗炬法語に大悲に兀坐の大梅の風致を滅せず天徳の垂手の殆んど葉縣の機輪に似たりとのたまひし一聯は痛く禪師の氣慨と家風とを慕ひたまひて最と有難くもまた殊勝なりし而してその靈骨を同地龜山の嶺に納めたてまつりこゝに高顯を建立し畢りぬ

接するに禪師能山に住中に随徒の百數十員にてありしがこゝに星霜十回の間或は在山にて方來の龍象を接得しまたは臨局にて百般の宗制を聽きたまひ時々諸國を巡化して普ねく群民を利濟したまふに未だ曾て抄時

も憩息したまふことなかりし慈悲の深大なる道德の高
崇なる滄溟山嶽も喩へとそるに足らざるべし嗚呼誰か
感佩せざらんや誰か尊重せざらんや

こゝに小師の聞く所によれば禪師の法嗣八名の中信州
の長國寺古鏡和尚を最となし首座六十一名の中城州の
興聖寺雪巖和尚を始となし隨徒一千四十六名に中稔山、
琢宗、悟由、柏巖等れ諸碩徳は青れ藍より出るもれなりと
云ふ眞にそれ然るにや

既にして禪師れ後董乃ち獨住第二世は内務卿閣下れ特撰
に依りて相州れ最乗寺法雲普蓋禪師棟仙大和尚之を繼席
したまひぬ

梅崖芳話終

梅崖芳話附言

如上の一篇は既に緒言にも誌せしがごとく對客所談の概
畧を摘撮せしものにして此他禪師の行實中種々の奇事異
蹟もありしか今其一二を擧ぐれば羽前妙覺寺にて三吉權
現のため大戒を授けたまひ三州妙巖寺にて叱枳尼天の
ため越中得成寺にて龍王のため同様法脈を與へたまひ
近くは山形龍門寺にて犛牛のため因縁脈を施したまひ
しことなど夥多なれども今は本篇の繁冗に渉るを恐れて
之を省き又禪師の姓氏あるひは薙髮前後の行實に就て種
種の異説をなすものなきにあらざれども一も的證のなき
ことどもなれば故らに採り用はず然れども此篇に於てハ
述て些しも作らざるなり讀者之を諒したまへ

明治十五年六月九日版權免許

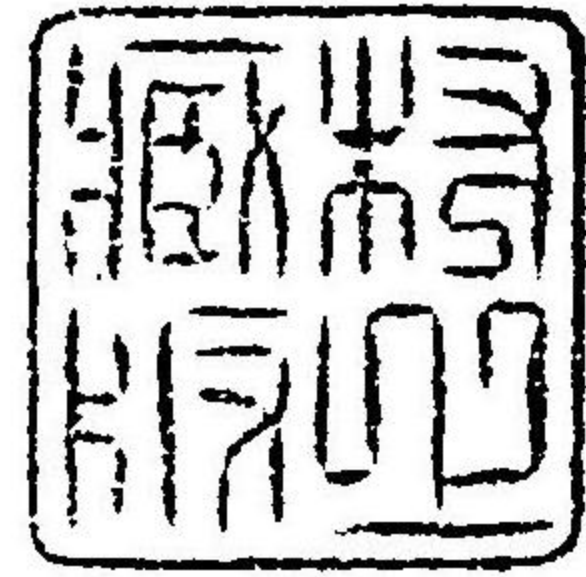
定價十錢

京都府平民

編輯兼出版人

村上泰音

東京芝區三田豐岡町八番地寄留



正誤

十四丁左の九行(三門に曰く)以下二十八行(拈香して曰く)の間一字づゝ上るべく又十六丁左の三行(索語に曰く)同六行(提綱に曰く)も二字上るべき所植字の位置を失ひ其他文字の魯魚圈點の誤脱等少差なきを免れず校者白

20
1
16

